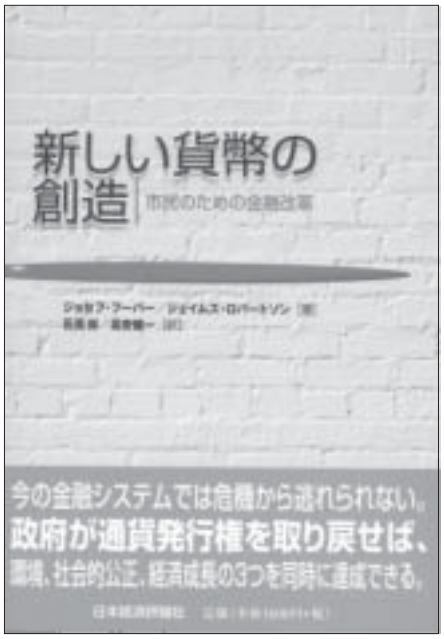
訳書紹介

『新しい貨幣の創造』Ｊ・フーバー、Ｊ・ロバートソン著

石見　尚・高安健一訳　（日本経済評論社、１６００円）

会員のひろば

評者：石見　尚（東京都／日本ルネッサンス研究所）



著者の一人、ジエームズ・ロバートソンは２０００年１１月の「いま協同を拓く全国集会」での講演のために来日したので、ご存知の方が多い。講演の内容は２１世紀の人間の働き方として、雇用に依存する働き方を超える時代の到来を強調したものであった。こうした人間らしい労働を支援するには、やはり先立つものが必要である。つまり通貨の循環の仕組みを変えることが必要で、市民大衆が決意すれば実行可能な財政金融の改革の展望を示しているのが本書である。

ところで本書は斜め読みしたり、寝転んで読める代物ではないように思う。その緊張感は、経済の集中的表現である貨幣、金融の難解性、抽象性にもよるが、より直接的には、欧米の金融グローバリゼーションが日本より少なくとも１０年早く進んでいて、われわれになじみのない話題が取り扱われているからであろう。しかし、１０年後と言わず、日本のいまの金融恐慌が一段落するにつれて、本書で扱われている問題はわれわれの身近な問題としてやがて浮上するであろう。

本書のよい点は、貨幣・金融問題に関心のある読者ならばどこからでも、いろいろな問題意識をもって本書にアプローチできることである。実際、著者たちは金融独特の呪文にも似た用語を排して、門外漢でも議論に参加できるように配慮している。その点で、本書は金融の本としては、型破りの本である。読み方は人さまざまであるが、読者は広い間口から自由に入ることができる。訳者としてこんな読み方もあるのではないかという話題を提供してみたい。

第１、お金は経済生活、とくに取引と貯蓄に便利な手段であるが、お金を扱う銀行業とは何か、それを本書は正面から提起している。銀行の機能は金融仲介、信用創造、決済手段からなるが、本書がとくに問題にしているのが、銀行による「信用創造」である。これが経済のバブルを誘発し、不良債権問題と税金による赤字救済、さてはペイオフ問題を引き起こしているのであるから、本書の根源的な問いは日本にこそ時宜に適している。そして著者は普通銀行による預金通貨の発行と

いう錬金術的な「信用創造」を取りやめるという大胆な提案をしている。（預金通貨という非現金貨幣の発生については、サムエルソン著，都留重人訳「経済学」第１５章　銀行制度と預金創出がわかりやすい。）

第２、上の提案には賛否があろうが、読み進んでいくと、中世末期からの銀行による預金通貨の発行による資本形成は、時代おくれの方法で、早晩なんらかの改変が必要になっているという指摘がある。そしてここから本書が佳境にはいる。たとえば、資本形成は銀行からの融資という間接的投資ではなく、資本市場によって行うべきだという前提があって、その上で貨幣発行の権限を市民国家の政府に戻し、中央銀行に信用貨幣の発行を一元的に委託することを提案する。経済と雇用を安定させる景気政策には，公定歩合の操作ではなく，通貨の総量規制という直接的方法のほうが現代的である。

第３、経済の構造改革の原理として国家と市場のいずれを選択するかが、現代の基本的課題であるが、著者は「国家」（ケインズ派）にも「市場」（新自由主義派）にも組みせず、独自の路線を提案する。それは社会的資源の共有の観点から、信用創造のシステムを市民管理に移そうという提案である。つまり信用創造による貨幣を社会的に有用な仕事の分野に直接的に充当しようというのである。歴史的に蓄積された物的資本や知的財産および土地、空気。水その他の自然資源は人類の共有財産であって、その持続可能な利用を図ることは、いまや地球市民の合意事項ではないか、そうだとすれば創造される「新しい貨幣」もこれに該当するというのである。労協法の思想には不分割資本の考え方が入っているが、この思想を突き詰めていくと、著者のコモンズの思想と交わる部面が生まれるではなかろうか。

第４、グローバリゼーションの行く末はどうなるか。グローバリゼーションの本質は金融グローバリゼーションであって、それを不可避なものにしている交通・通信，情報の革命はやがて電子マネーによる取引の拡大に導き、銀行の決済機能の業務さえ縮小させていくと著者は見ている。そして貨幣発行は国家の独占ではなくなり、地域貨幣、国家貨幣、世界貨幣の多層構造に移行してゆくと見るのである。個人は自分の金は自分で管理するようになり、１００％に近い準備率を求められる銀行は金融サービス機関に移行してゆくであろう。早い話が、ワーカーズ・コープの事業の発展は、自前のマイクロ・ファイナンスなしにはありえない。ワーカーズ・コレクティブが１９９７年に女性・市民バンクを設立し、協同組合員から資金を集めて、ワーコレ事業を支援しているのがその例である。人々は本当の信用こそ地域社会における人間のつながりにあるという「人間本位制」の価値に目覚めてゆく。そのような市民社会では，市民グループは国内はもとより世界連帯へと発展していき、資源を地球規模で共有する思想へと急速に成長していくとみるのである。これに関して、国連やＩＬＯ、ＩＣＡ、そのほかＮＧＯの動向が鍵になると見られている。

こうしてみると、本書は一見、協同組合とは縁遠い問題をとりあげているようでありながら、根底では協同組合運動をとりまく社会経済の基本問題を論じていることがわかる。アングロサクソン的グローバリゼーションにたいして日本型資本主義論が盛んな昨今であるが、競争よりも協同・共生を基礎にした将来社会の原理と可能性を論じることが早道であるように思うのだが。